

日常の抽象化に抗して

学院長 嶋田 順好

クリスマスになると、いずこのキリスト教学校でも降誕劇を行います。そこに決まって登場するのは、マリアとヨセフ、生まれたばかりの御子イエス。そして天使や羊飼いたちと共に登場して来るのが東方の占星術の学者たちです。長いガウンをまとい、宝の箱を恭しく献げ持って、「ピカピカ光るあの星は、救い主イエス様のお生まれになった徴です」と指さす姿は、ページェントにはなくてはならぬ名場面の一つと言えるでしょう（マタイ2:1-10）。

この占星術の学者たちがどこの国の人であったのか。アラビアか、バビロニアか、ペルシャか。その辺のことは聖書からは定かにはなりません。ベツレヘムへの旅路は、多分500キロ、1000キロにもなる命がけの長途の旅であったに違いありません。言うまでもなく彼らは天体に精通し、夢を解いたり、占いをしたりするのが仕事でした。東方世界では祭司として王にアドバイスをしたり、民を導く指導的立場にある人々だったのです。

10節には「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」とありますが、ここで「喜びにあふれた」と訳されている言葉は、直訳すれば「非常に大きな喜びをもって喜んだ」ということです。彼らは言い尽くせないほどの大きな喜びにと捉えられたのです。彼らがいままで拝し続けた神々は、遠く遙く天空に青く赤く瞬く星辰でした。それが彼らの神々でした。しかし、彼らがベツレヘムで見いだしたお方は、家畜小屋の飼葉桶に横たえられた人となりたもうた神でした。ひときわ低く貧しい赤子の誕生の場でしかなかったのです。

彼らはこの事実につまずいたのでしょうか。彼らはその事実を目の当たりにして落胆したのでしょうか。「なんだ、これがユダヤ人の王か、これがまことの救い主か」と。いいえ、そんなことはありませんでした。彼らは、ただ非常に大きな喜びをもって喜んだのです。そして、ひれ伏し、拝し、惜しげもなく、自分が持っている最も善き宝物を、この最初の礼拝の場において献げきったのです。学者たちはどうして、この救い主の低さと貧しさにつまずかなかったのでしょうか。それは、低きに降る神、語りかけてくださる神、共にいてくださる神をそこに見いだしたからではないのでしょうか。「神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられた神。「人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順」（フィリピ2:6-8）であられた愛の神を見いだしたからに違いありません。

コロナ禍の中での自身の歩みを振り返ると、次第に回復してきたとは言え、礼拝も制限され、講演会も、音楽会も、同窓会の諸集會も中止となり、様々な會議も書面やオンラインとなってしまいました。そのメリットも大いにあるのです。何より会場移動の煩わしさから解放され、人々と接する挨拶も必要とされません。自室に留まったまま様々な仕事を効率よくこなすことができるのです。そこにはある種の気軽さ、自由さ、快適さが備えられています。しかしまた日常の抽象化と無関心という誘惑が、忍び寄ってきていることはないのでしょうか。大切なことは「神を畏れ、隣人を愛する」ことをスクール・モットーとする宮城学院に遣わされた私たちは、無関心と抽象化の中にとぐるのを巻くのではなく、常にそこから出会いと関りを求めて一歩踏み出す志を持ち続けるということではないのでしょうか。

御子イエスは、神と等しい者であることに固執しようとはせず、人となって私たちのもとに到来してくださいました。東方の占星術の学者たちは、その救い主に拝するために命がけの長途の旅に出ました。その一切はリアルな出会いを求めての出来事でした。愛は抽象の中には宿りはしません。確かにコロナ禍は、時として私たちに抽象の中に留まることを強めます。だからこそ抽象に覆われがちな日常の中で、ささやかではあっても具象を重んじ、何より園児、生徒、学生との人格的な関りを持ち続けることが、このアドベントの季節に問いかけられている最も重要な教育的課題ではないかと思うのです。